

第二十六章 幕間狂言

五カ月間にわたった拳党協騒動は、一転妥結して大団円を迎えたかに見えたが、それは党内だけのことで、対外的には何も解決されたわけではなかった。

自民党をめぐる国民の批判はますます厳しかった。その中で、近々二、三カ月以内には四年の議員任期が満了となり、総選挙による国民の審判を受けなければならないのである。しかも、党内抗争で時間を空費してしまったため、総選挙の準備はほとんどできていなかった。

臨時国会召集前日の九月十五日、三木首相は党、内閣の改造を行った。それまでの人事体制は三木内閣発足以来のものだったが、この間、一年九カ月を経過しており、改造なしの内閣としては戦後最長のものとなっていた。三木としては、臨時国会を乗り切り、総選挙に対処するための自前の内閣を作らなければならなかったのである。拳党協側は、選挙後には総理・総裁を含め体制の全面刷新は必至と見て、閣僚人事にはそれほどこだわらなかつたが、党三役、とくに幹事長に対してだけは重大な関心があった。

十五日早朝から南平台の私邸で組閣人事のまともに入った三木首相らも、改造の要を党三役の人選に置いた。午前十時頃には、首相から福田、大平に連絡があり、幹事長松野頼三（福田派）、総務会長桜内義雄（中曾根派）、政調会長内田常雄（大平派）の構想に協力してほしいと言ってきた。

松野は、吉田系から、緒方、石井派を経て、佐藤派の幹部となり、三木内閣の誕生と同時に福田派から政調会長に選ばれた人物である。しかし、その後三木に接近して、福田派の不満を呼んでいた。したがって、松野幹事長案を知らされた福田派内部には、強い反発が生じた。むろん、大平派も松野には反対であった。同じく総務会でも、過半数を占める挙党協側の総務たちが松野幹事長案に反発していた。

午後一時から、自民党本部の総裁室で、三木、福田、大平、中曽根、灘尾、松野、石田の七者会談が開かれ、結局、三人の顔ぶれは変えないが、松野に幹事長を辞退してもらうことで妥協が成立した。内田幹事長、松野総務会長、桜内政調会長の案がまとまったのは午後三時過ぎのことである。

幹事長に内定した内田は、大蔵省で大平の六年先輩にあたる。政界への出馬は大平と同じ昭和二十七年であり、政策通として知られてはいたが、政略を得意とするタイプではなかった。自らもそのことを知悉していた内田は、幹事長就任の知らせを聞いて、大平が記者懇談をしている最中の宏池会に血相をかえて飛びこんできた。大平の姿を認めるなり、内田はいきなり食ってかかった。

「私は幹事長なんかやりませんよ。政調会長なら少しはお役に立てると自分でも思っていたのだが、いま聞いてみれば幹事長だつて言うじゃないですか。そんな、中華料理じゃあるまいし、テーブルをぐるりと回すなんて……。妥協もいいけど、人を見て決めてくれ。ぼくは幹事長なんていう柄じゃない」。

大平、鈴木、宮沢といった宏池会の幹部は激昂する内田を縁がかりで別室に連れ込み、暑い日に汗をながして説得に努めたが、内田は頑として聞き入れようとしなかった。

記者団から情報が入ったのだらう、三木側近の海部俊樹官房副長官（現総理大臣）も、内田説得のために官邸から飛んできた。みんなの説得によって内田が折れ、「とにかく官邸に行くだけは行く」と言って組閣本部に向かったのは午後五時を過ぎていた。

その夜、改造は終わった。三木改造内閣では、挙党協に入らなかつた閣僚は全員留任し、挙党協に属した

閣僚は、福田、大平両相を除いて、全員交代した。入閣した閣僚のメンバーは三木色が強かった。

改造の済んだ翌十六日の夜の挙党協十五閣僚の慰労会で、発起人の金丸前国土庁長官は、「われわれの目的はまだ達していない。あとは、福田、大平のお二人でよく話し合ってまとめてください」と述べた。これは要するに、今後の政権の受け皿をどうするかということである。

ポスト三木の政権担当者を誰にするかという「受け皿」問題は、挙党協騒動の間、政局を左右する決め手として見え隠れしていたが、事態がここまでくると、もう避けては通れなかった。

「公選なら大平、話し合いなら福田」という党内の常識を前提として、福田周辺は話し合いに意欲を示し、あらゆる人脈を動員した。工作は多様に展開され、目まぐるしい裏の動きがあった。大平の腹心、田中六助もこの線で動き、十月上旬、三日間にわたって大平とこの問題を討議し、十月六日、大平から一つの感触を得た。

田中六助は「私はすぐに福田さんに連絡をとった。福田さんは赤坂の料亭の部屋で待っているといつので私は行った。『大平は承知したよ』と言うと、福田さんは喜んで『一年でもいい、一年半でもいい』と言った。私が『後は大平に頼む』と念を押し、福田さんも同意したので、それをまた大蔵省の大平のもとに報告に行った」と語っている。

このことは福田から保利に伝えられ、十月十日、保利は大平と神奈川県茅ヶ崎のスリーハンドレッド・クラブにゴルフに出かけた。

のちに、保利が語ったところによれば、その時の模様は次のようだったという。

「ぼくは政権にはこだわるものではありませんよ」と大平が言った。

保利が「あつたことを決めておかないと党の足並みが乱れる。ところが、君と福田君がいる。そこでどうするか心を痛めていたのだが、君の決断で救われたよ。あとはぼくが責任をもって文書によってきちつとす

る」と、答えると、大平は、「証文なんかもらっても、どつにもならないことはわかっていますから、結構ですよ」と言った。

「いや、ぼくが中に入るのだから、そういうわけには行かない」。それが保利の心境だった。大平は、のちに周辺のものに、「保利さんはぼくの意志を確認するために会ったのだと思つ」と述べている。

ポスト三木の「受け皿」についての福田、大平間の合意を確認すると、保利は、椎名副総裁の説得にかかったが、椎名は福田が総理、総裁になることに強く反対した。

椎名は保利に対して、「いったい福田にどのくらいやらせるのかね、一月かね三カ月かね」と言ったが、これに対して保利は、「まさか二、三カ月というわけにはいかないでしょう。やっぱり一期はやらせないと。ただし任期は二年でしょう」とこたえたという。しかし、この時の椎名の最大の不満は、三木首相に対する拳党協の態度にあつた。当時の内情を知る一人は、次のように語っている。

「椎名さんは、どんな形にしる三木さんを党の力でやめさせたいという形をとりたかつた。だから、三木解任決議を最後まで主張した。もうこれ以上はしようがないという段階でも、椎名さんは三木さんをやめさせると粘っていた。最後は三原さんたちまでが椎名さんをなだめに入った。保利さんは、そんなことをしたら党が分裂する」と言うのだが、椎名さんは、「三木をやめさせる」と言っただけでなく、党の権威というものを何としても確立したいと

考えていたのだらう。

受け皿論議の最後の詰めは、十月二十日と二十七日の二回にわたり、品川のホテル・パシフィック東京で行われた。福田側は福田、園田。大平側は大平、鈴木。この四人と立会人の保利が加わって、計五人の会談となった。

第一回会談は大平の意向とそれをめぐる政局運営の基本的確認が第一の目的だったが、同時に、さし迫る総選挙をどう戦つか、年を経て腐蝕のきた党をどう立て直すか、今後の政治運営をどう分担するか、政局轉換の段取りをどうするかなど、党が当面する危機の打開について討議が行われた。

第二回は、一回目の会談の整理と確認が行われ、この席で、ポスト三木が福田であることが合意された。保利は、「福田内閣は二期二年で」と言い、これが承認された。出席者の一人、園田はこう記している。

「三木内閣は間違いなしに総辞職するだろうが、そのあとは自然の流れからすると大平内閣が成立する。それはそれで良いことだが、しかし私のかついできた福田超夫さんがそれでは、ひよっとすると永久に政権を取れなくなるというので、大平さんに頼みこんだのがホテル・パシフィックでの五者会談であった。……この席ではむずかしいことは大平さん、ひとこともいわなかった。そればかりか、福田さんが総理を二年つとめて『それから先のことをどうするか』という話になった時、大平さんが初めて口を開いた。『二年後のことを今ここで話し合っても仕方ないんじゃないでしょうか。二年後のことは二年後にあらためて話し合うことにしようじゃありませんか』。

下司なら『二年後に政権を大平に渡す、と文書にしろ』と迫るところである。しかし大平さんはその逆を行つた。私は胸に迫るものがあつた」。

園田がこのときの大平の発言について保利に、「大平さんには負けました。これじゃ二年後、私たちは大平政権樹立のために走り回るということを約束させられたようなものですね」と会談の帰り道に話し合ったのも、『人間の信義』を保証とした大平の態度に打たれたからであらう。

この会談で確認された文章は次のようなものであつたと言われる。

「一、ボスト三木の新総裁及び首班指名候補者には大平正芳氏は福田赳夫氏を推挙する。

一、総理総裁は不離一体のものとするが、福田赳夫氏は、党務を主として大平正芳氏に委ねるものとする。

一、昭和五十二年一月の定期党大会において党則を改め総裁の任期三年とあるを二年に改めるものとする。右について、福田、大平の両氏は相互信頼のもとに合意した。

昭和五十一年十一月

福田 赳夫(花押)

大平 正芳(花押)

園田 直(印鑑)

鈴木 善幸(花押)

この文書が作られたのは保利の強い希望によるものである。おそらくその狙いは、ここでの合意が福田・大平という当事者によって守られるだけでなく、それぞれの派がこれを守れることを担保しようとしたものである。だからこそ、園田、鈴木という両派の最高幹部を加えて、署名をすることが求められたのではないだろうか。いずれにせよ、この文書は、保利の苦衷のあらわれとも言えるものであった。

立会人の保利は署名もしなければ手も触れず、のちに大平に「くれぐれもあの文書は表に出さないように」と注意したという。むろん、大平もこの文書の存在について自ら語ったことはなかった。

九月十六日から開かれた第七十八回臨時国会では、十月十五日、大平蔵相らが熟意をこめていた公債特例法案が遅ればせながら成立し、また、国鉄運賃、電信電話料金の値上げ法案も成立した。これによって、五十一年度の財政がようやく正常化した。

また、この時期、五十二年度予算の編成作業の中で、三木内閣は、これまでの所要防衛力構想から基盤防

衛力構想に防衛計画の方向を転換して「防衛計画の大綱」を決定するとともに、各年度の防衛関係経費の総額が当該年度の国民総生産の1%を超えないものとするとの閣議決定を行った。

臨時国会も終わりに近づき、政局の焦点は任期満了選挙一本に絞られた。しかし、党は全く戦う体制になく、派閥も疲労の極にあり、候補者一人一人は、マスコミ、世論、野党の非難の中で、自分の力だけを頼りに全力をあげて生き残る以外になかった。

第三十四回衆議院議員総選挙は、新憲法下初の任期満了選挙として十二月五日に投票日を迎えたが、その結果は、自民党にとって予想より遙かにきびしいものとなった。当初は公認候補の当選者は二百四十九名で自民党は結党以来はじめて過半数を下回った。無所属当選者の入党、追加公認を加えて最終的には二百六十一名になったが、過半数の二百五十六名を上回ることわずか五名であった。国民は自民党に冷厳な審判を下した。考えてみれば、これまでの政争は結党以来つねに安定過半数を確保し、政権が自らの手中にあるという状況のもとでの争いであった。だが、いまやその政権を支える基盤自体が首を立てて崩れている。三木も反三木もともに敗者であり、全党は息をひそめて三木首相の出入を見守った。

爆発的人気を集めたのは自民党から離党した河野洋平たちの新自由クラブであり、また公明党、民社党も進出した。これに反して、社会党と共産党も振わなかった。すなわち、自社一大政党がともに沈んで、中道政党が盛りあがった。先に伯仲状態に入っていた参議院同様、衆議院も与野党の議席数が接近し、政治は、自民党安定多数の時代から保革伯仲時代、あるいは脱イデオロギー対立の時代という新しい局面を迎えたのである。

十二月十七日、三木首相はついに退陣声明を発表した。

その翌日、大平は、内田幹事長が党を分裂させずに「ここまで持ってきてくれたこと」に対して、「いつの日か内田さんに報いなければ」と側近に語ったが、内田は幹事長退任後、間もなく病を得て他界した。大平は甲

辞のなかで、「為して恃まず、功成りて居らず」という在り方を自然に示された」と内田の功績をたたえた。

三木退陣の後をうけて、後継総裁と首班指名候補を選任するため、十二月二十三日、党大会に代わる両院議員総会が開かれ、福田は満場一致で選出された。

大平は不出馬の弁を次のように語った。

「石油危機後の経済的諸困難の克服も、伯仲状態を迎えた政治情勢も、きわめて厳しい。その上、いまの自由民主党という土俵は、私と福田さんが四つに組んで相撲をとれるほど広くはない。いまはまず党という土俵をしつかりさせることだ。その上で、堂々と公選でも何でもやらねばよいではないか。何よりもまず、わが党は政権政党として伯仲国会を運営するという国民の負託に応えるところがなければならぬ」。

福田赳夫総裁就任の翌二十四日のクリスマススイブに臨時国会が召集され、首班指名が行われた。衆議院の出席議員数は五百八名。福田は過半数を上回ることわずか一票の二百五十五票を獲得して首班に指名された。

福田新首相は直ちに大平幹事長、江崎真澄総務会長、河本敏夫政調会長の新三役を決定し、ついでこの三役と安井謙参議院議員会長、團田直官房長官を参謀に組閣を行って、その夜のうちに宮中の認証式もすませた。閣僚としては鈴木善幸農林、田中龍夫通産、石田博英労働等のベテランの他、鳩山威一郎外務、渡辺美智雄厚生、海部俊樹文部、石原慎太郎環境等、異色の新人が抜擢された。また、衆議院議長にはこの政権の生みの親である保利茂が選任された。大福提携と称される新しい時代が始まった。

なお大平は、この総選挙の直後に兄数光を失った。数光は町民の信望厚く、当時、豊浜町の町長を三期つとめ、すでに後進に道をゆずっていたが、弟正芳のこの十回目の選挙の成績が総裁への道の重要なステップと考え、十万票の獲得を目標に異常な熱の入れようであった。

選挙が告示されて間もなく疲労がひどくなり、周囲のものが数光の嫌がるのを押し切って入院させた。十月三日夕刻、全国遊説を終えて愛媛県境から選挙区入りした大平は、そのまま病院に向かい、兄を見舞った。数光は、弟の姿を見るなり、「なんぼとれるんぞ」と、大平派議員の当選見込みをたずねた。総選挙が終れば、総裁公選があるという予測からである。大平は、「前より増えるぞ」と答えた。地元遊説の日程はきびしく、正芳はあと一度兄に顔を合わせただけで、あわただしく帰京した。

開票の結果は、大平は九万八千四百十二票、得票率四二・三%の第一位、堂々たる成績であった。数光は手をたたいて喜び、「病気はもうなあった。早く家に帰してくれ」と言っていたが、投票日二日後の七日夕方、突然の発作で死亡した。原因は心筋梗塞である。